

独創の原点

私の「特別研究員・海外特別研究員」時代



徒弟時代のゲーテ研究者

石原あえか

東京大学大学院総合文化研究科 准教授

石原あえか(いしはら・あえか)

東京大学大学院総合文化研究科
言語情報科学専攻准教授

1992年、慶應義塾大学文学部独文学専攻卒業。1994年、同大学大学院文学研究科独文学専攻修士課程修了。1998年2月、ドイツ・ケルン大学哲学部より博士号Dr. phil./Ph. D.取得。1994年4月～1997年3月、特別研究員-DC1。1998年11月～1999年3月、特別研究員-PD。2002年9月～2004年9月、海外特別研究員(ドイツ・ケルン大学)。慶應義塾大学商学部教授(ドイツ語)を経て、2012年より現職。フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞(2013年)など受賞多数。

ドイツの詩人ゲーテ(1749～1832年)の研究で

国際的に高い評価を受けている石原あえかさん。

「本場ドイツでの研究に挑戦したい、と思っていました。

それを実現できたのは、特別研究員と海外特別研究員制度があったから」

そう語る石原さんは、ゲーテと自然科学という独創的な視点で研究を進めている。

「私が書いた日本語の本は、書店でどの分類の棚に置いたらいいかわからない、と言われてしまうんです」と苦笑する。

石原さんの独創の原点とは？

国文学を学ぶつもりが

——子どものころ、何に興味を持っていましたか。

石原：本が好きで、小さいころからたくさん読んでいました。小学校高学年くらいになると世界文学全集なども読んでいましたが、あらすじは追えても、まだ大人の心の機微がわからないから面白くないんです。そこで自然科学者の伝記や自然科学系のノンフィクションを手当たり次第に読み始めました。もともと博物館も大好きだったので、夏休みには化石発掘体験学習にも参加していました。高校では地学部にも所属して、太陽黒点や天体の観測をしていました。

高校時代は、自然科学も好きでしたが、古文・漢文にもめり込みました。祖父が付けてくれた私の名前が「あえかなり」という古語に由来していることも、古文に興味を持ったきっかけの一つです。そして国文学を学ぶつもりで慶應義塾大学文学部に進学しました。

——にもかかわらず、独文学を専攻したのはなぜですか。

石原：1年生の第二外国語で選択したドイツ語がきっかけです。ドイツ語は文法が難しいと嫌う人が多いようですが、私にとってはパズルのように楽しく、波長が合ったのです。

3年生だった1990年、国際ドイツ語ドイツ文学学会(IVG)という大規模な国際学会が慶應義塾大学の三田キャンパスで開催され、独文学専攻の学生は総出で手伝われました。

第一級の研究者たちが世界中から集まり、ドイツ語が飛び交う。そんな中で1週間過ごし、刺激を受けました。IVGは5年に1度の開催で、しかも欧米以外での開催はそのときが初めてだったと思います。この巡り合わせがなかったら、違う道に進んでいたかもしれません。

研究者としての“徒弟時代”

——ゲーテとの出会いは？

石原：卒業論文のテーマはヘルマン・ヘッセの『ガラス玉演劇』でした。この作品の主人公の苗字「クネヒト」は、ドイツ語で「従僕」という意味です。ヘッセは執筆時に、従僕と対になる「親方」を意味する「マイスター」という苗字を持つ主人公が登場するゲーテの作品を強く意識していました。従って、修士論文でゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』を扱うのは、私にとって自然な流れでした。ただしそのときは、ゲーテの奥深さ、大変さを分かっています。知っていたら手を出さなかったでしょう。

修士2年のとき、ヴァイマル国際ゲーテ協会から奨学金を頂いて3カ月間、ゲーテが住んだ町ヴァイマルに滞在しました。私にとって初めての海外研究滞在でした。まだ日本人が珍しい旧東ドイツ地域、大きな研究図書館で独りぼっち、ドイツ語は読めても日常会話はおぼつかない……。そんな私

を氣遣って、何人もの女性研究者が声を掛けてくれました。貴重書の扱い方をはじめ、本場のゲーテ研究とはこうやるものだと、いろいろ教えてくれました。第一線で活躍する彼女たちは自信に満ちていて、心に余裕があり、プライベートも上手に楽しんでいて、とても素敵でした。母校の所属専攻では見たことのなかった女性の独文学研究者に会い、彼女たちのようになりたくて、まずは彼女たちの持っている博士号をドイツで取ることを目標にしました。

——慶應義塾大学大学院の博士課程に進むと同時に、特別研究員-DC1に採用されました。

石原：特別研究員-DC1で海外滞在が認められている日数を最大限使ってドイツ・ケルン大学で研究をしました。当初は聴講生のような立場でしたが、絶対にドイツで博士論文を書く決めていたので、1年目のうちに資格を博士候補生に書き換えました。さらに1年弱、私費でドイツ滞在を延長し、ゲーテの後期作品『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』における近代天文学についてドイツ語で論文を書き上げました。口頭試験にも合格、念願の博士号を取得することができました。

ドイツで過ごしたその2年半は、研究に通用するドイツ語と研究のやり方を徹底的に仕込んでもらった、まさに私の研究者としての“徒弟時代”でした。特別研究員として頂いたお金は、ちょうど円が強い時代だったことも味方して、重要なゲーテ全集をはじめ研究書につき込みました。そのときに入手した本は、今でも私の大事な仕事道具です。

再びドイツへ

——ゲーテと自然科学という独創的な視点は、どこから生まれたのですか。

石原：ゲーテは日本では詩人として有名ですが、彼は官僚でもあり、銀鉱山の再開発や公園整備や大学経営にも携わっています。そうした経験から地学や植物学、さらには解剖学や医学、動物学にも興味を持つようになり、論文も執筆した自然研究者でもありました。私が学生だったころ、ゲーテと天文学の関わりについては研究が進んでいませんでした。日本では文系と理系の壁があり、またドイツでも文学と自然科学というテーマに取り組む人は少数です。でも私はもともと地学にも天文学にも興味があったので、迷いなくこの課題を選びました。ドイツの指導教授はどうなることかとハラハラしていたと、後で聞きました。

——その後、海外特別研究員にも採用されました。

石原：ドイツでは研究者として独り立ちを目指す人は、博士論文を手直して研究書として出版した後、すぐに教授資格論文と呼ばれる次の研究書の執筆に取り組みます。私は幸いにもドイツで博士号を取得して間もなく慶應義塾大学商学部のドイツ語教員に採用されたのですが、ドイツの研究者と同じように次の研究書を書きたいと考えていました。海外特別研究員に採用されたことで、それを実現できました。ケル

ン大学を拠点にして、博士論文のときよりさらに厳しい指導のもとで2年かけて、2冊目となる全文ドイツ語による研究書『ゲーテの《自然》という書物』を書き上げました。

——その研究書は、ドイツ学術交流会(DAAD)のヤーコプ・ヴィルヘルム・グリム奨励賞を、また日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を授与されました。

石原：海外特別研究員は、本当の研究者に育てていただいた期間だったと思います。ドイツと日本の両方で認めていただいたおかげで、多少、ゲーテ研究がやりやすくなりました。

研究は生きていくのに不可欠な空気のようなもの

——その後、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団の奨学金を受けてイエーナ大学に1年間研究滞られています。

石原：その滞在の成果として、ゲーテの後期作品『親和力』の登場人物と測量学の関わりについて3冊目となるドイツ語の研究書を書き上げ、また初の日本語著作でありサントリー学芸賞を受賞した『科学する詩人ゲーテ』を執筆しました。

最近の奨学金制度は数カ月程度のもものが多くなっているように思います。外国語や外国文学の研究者は、その国に行く必要があります。しかも一度行ったらおしまいでなく、定期的な交流が必要です。腰を落ち着けて研究ができる長期の奨学金制度や、数年間海外に滞在して戻って来ることができる人事制度の整備を、ぜひお願いしたいと思います。

——最近はどのような研究をされているのですか。

石原：『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のある章をきっかけにゲーテと近代皮膚科学の関わりに興味を持ち、皮膚科学教材として使用された特殊な標本について、数年かけて国内外で追跡調査をしています。並行して、イエーナ滞りの成果として執筆した研究書を、『近代測量史への旅』と題して日本語でも刊行しました。ありがたいことに、測量学関係の方からも好意的な評価を得ることができ、測量専門誌にコラムなども書かせていただきました。

私の論文を検索すると、天文、測量、皮膚科学といったキーワードが並んでいるので不可解に思うかもしれませんが、全部ゲーテでつながっています。これからもゲーテを楽しく追い掛けていくのでしょね。私にとって研究は、空気のようなもの。あって当然で、なければ生きていけない。研究が楽しくて、研究をしていると幸せなんです。

(取材・構成：鈴木志乃／フotonクリエイト)
平成28年8月31日取材

海外特別研究員時代、ドイツ語圏のゲーテに関わる場所をくまなく回った。写真は、ゲーテの『ハルツ冬の旅』を実体験するため、蒸気機関車に乗ってハルツ山地の最高峰ブロッケン山を連日往復したときのもの。

